



〈日本農業経営大学校〉 ゼミ紹介～小口ゼミ～

日本農業経営大学校では4つのゼミを設けており、学生はいずれかに所属することとなっています。

4つのゼミは、松尾ゼミ（主にマーケティング）、前田ゼミ（主に食と農業）、小口ゼミ（主に地域づくり）、折笠ゼミ（主に営業戦略）です。ゼミの取組みについて、今回より3回シリーズでお届けします（次年度より折笠ゼミは新しく変わりますので省略します）。最終回は、小口ゼミです。ゼミでの活動を交えながらご紹介いたします。それではお楽しみください。

1. ゼミの概要

小口ゼミでは「地域づくり」をテーマに農山村と都市双方の取組みに焦点を当てながら活動しています。進め方は文献輪読とフィールドワーク（以下、「FW」）です。学生の問題関心に沿った文献を選択し、FWでは輪読で得た知識を自分の目で確かめ、さらに問題関心を掘り下げ、実践知を獲得します。文献輪読とFWは“理論”と“実践”、言うなれば“車の両輪”のようなものです。

2. 2013年度の振り返り

それではゼミ生4名とともに取り組んだ1年間のゼミ活動を振り返ります。新学期が始まり現地実習までの5～6月は、『都市農業を守る』（蔦谷栄一）、『菜の花エコ革命』（藤井絢子・菜の花プロジェクトネットワーク）、『地域社会農業』（吉田喜一郎）を輪読し、石坂ファームハウス（東京都日野市）、青木農園（東京都多摩市）、あいとうふくしモー



△現地調査での1コマ。左右2名ずつがゼミ生。

ル（滋賀県東近江市）、あいとう菜の花エコプラザ館（滋賀県東近江市）などを訪ねました（詳細は本メールマガジン16号、21号-22号を各々参照）。



△滋賀県東近江市で宿泊した農家民宿にて

現地実習を終えて年末までの11月～12月は、『農山村再生に挑む』（小田切徳美編）、『地元学からの出発』（結城登美雄）を輪読し、銀座ミツバチプロジェクト、渋谷で開かれている東京朝市アースデイマーケット、桜新町にある自然食品店「Cocohana（心花）」の担当者からそれぞれお話を伺いました。また、ふくしまオーガニックフェスタに参加し、二本松市や南相馬市の有機農家と交流しました。

年が明け3月までは、『移行期的混乱』（平川克美）、『人口減少社会という希望』（広井良典）、『有機農業の技術と考え方』（金子美登他編著）を輪読し、マクロの視点から日本の社会と農業の分析も加えました。FWでは東京都府中市の株式会社登喜和食品や、高知県を訪ねて須崎

※本誌の無断転用・転載を禁止します。

[発行人] 一般社団法人アグリフューチャー・ジャパン

〒108-0075 東京都港区港南2-10-13 農林中央金庫品川研修センター5階

TEL：03-5781-3750 FAX：03-5781-3752



日本農業経営大学校

Japan Institute of Agricultural Management



〈日本農業経営大学校〉 ゼミ紹介～小口ゼミ～



△株式会社登喜和食品 視察の様子

市のまちづくりと高岡郡四万十町で有機農業を営む桐島畑、地域資源を活用した商品開発に取り組む株式会社四万十ドラマ、情報発信やインターンシップの受け入れ事業に取り組む一般社団法人いなかパイプを訪ねました。

このような文献輪読やFWを補完するものとして、映像作品の鑑賞や、勉強会、シンポジウムにも積極的に参加しています。また、3月からは卒業研究として提出する経営計画の策定に向けた準備も進めており、3月中には就農動機と就農計画をまとめる予定です。

3. ゼミで何を学ぶのか

文献輪読とFWを通じてゼミでの学びとは何なのかを考えてみたいと思います。それは、「文献輪読の目的は読んだ内容をうまくレジュメにまとめて発表すること、その内容を事細かに記憶すること」ではありません。重要なのは普段一人では読めない／読まない良質な文章に触れ、その分野に精通した先達の実践や考え方、表現にひとつでも多く触れることにあります。

前述したとおり、FWは文献輪読と車の両輪に位置づけています。そのため、FWは文献輪読や映像鑑賞などで

得た問題関心を実際の現場での動きと突き合わせ、さらにその延長線上に自分が卒業後就農する地域と照らし合わせ、問題関心を掘り下げていくことが大前提です。

こうした前提を踏まえ、FWでの学びについて考えてみると、ひとつは地域で楽しく、いきいきと同時に強い信念を持ちながらもしなやかに生きる人々の声に耳を傾けることです。これはコミュニケーションとしての傾聴です。FWでは一日に3～4人のキーパーソンからそれぞれ2時間以上お話を伺い、さらに現場見学もさせていただきます。農家民宿などに宿泊すると膝を突き合わせながら農家とお酒を飲み、夜中まで談義が続きます。ゼミ生はタイトなスケジュールのなか、一日中メモ帳やICレコーダーを手放せません。

ただし、FWでは注意しなければならないことがあります。それはこちらが一方向的にヒアリングをし、現場を見学して終わりにしないようにすることです。端的に言ってしまうと、FWはお互いが創り上げていく作品です。このことがFWから得る大きな学びです。それではどう学生たちが主体的に参加し、作品を創り上げていくのでしょうか。

まずは質問をすることです。文献を読んで質問を考えることは大して難しいことではありませんが、FWでの質問は独



※本誌の無断転用・転載を禁止します。

[発行人] 一般社団法人アグリフューチャー・ジャパン

〒108-0075 東京都港区港南2-10-13 農林中央金庫品川研修センター5階

TEL：03-5781-3750 FAX：03-5781-3752



日本農業経営大学校

Japan Institute of Agricultural Management



〈日本農業経営大学校〉 ゼミ紹介～小口ゼミ～

特の難しさが伴います。現場に出ると事前に文献などで得た机上の知識やそこから得た問題関心が打ちのめされることが多々あります。その時にその場で感じたこと、疑問に思ったことをしっかりと自分のコトバで質問し、関心を掘り下げていけるかどうかです。

続いて、相互にコミュニケーションをはかることです。この場で学生たちは自分のこと、地域のこと、ビジョンなり夢を相手に語り、それに対して質問や意見、アドバイスをいただきます。さらに、それに対して学生が応えるという、このやりとりです。つまり、相手が理解できるコトバで、自分を、そして地域を語れるのかが重要なのです。

文献輪読やFWでは色々な考え方に触れ、知識を得ることはもちろんですが、自分の考えや実践を表現するためのコトバを良質な文章やキーパーソンの語りから獲得し、その引き出しの数を増やすことにつなげてもらいたいと思っています。極端なことを言えば、販路を開拓したいからといって難しい理論ばかりを勉強するのではなく、「自分のコトバで消費者を振り向かせて惚れさせてみる」ということです。

ゼミのテーマは「地域づくり」と書きましたが、「自分のコトバで現場とキャッチボールをすること」、これが2年間を通じて少しでも身につけてもらいたい裏のテーマです。



小口 広太

主な経歴：2013年明治大学大学院農学研究科博士課程単位取得退学。日本農業経営大学校で指導教員をする傍ら、恵泉女学園大学非常勤講師（「有機農業とアグロエコロジー」「生活園芸」担当）を兼任している。

担当業務：指導教員（専門：農村社会学、有機農業研究）

